

平成 25 年度 全国学力・学習状況調査の本市の結果について

小田原市教育委員会

1 はじめに

平成 25 年 4 月に実施された「平成 25 年全国学力・学習状況調査」の本市の調査結果の概要についてお知らせします。結果については、平成 21 年度から、市全体の平均正答率等、数値を全国の数値と比較する形で公表しております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であることや、学校における教育活動の一側面に過ぎないことなどを踏まえ、結果については、序列化や過度な競争につながらないように十分配慮して取り扱う必要があります。従って、本内容をご活用の際にはこの趣旨を十分ご理解いただき、適切な取扱いをされますようお願いいたします。

2 調査の概要

(1) 調査の目的

- ① 国が、義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- ② 各教育委員会や学校等が全国的な状況との関係において自らの教育及び教育施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- ③ 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

(2) 調査の実施日

平成 25 年 4 月 24 日（水）

(3) 調査の対象

小学校第 6 学年 中学校第 3 学年

(4) 調査の内容

① 教科に関する調査

- ・国語 A、算数・数学 A（主として「知識」に関する問題）
- ・国語 B、算数・数学 B（主として「活用」に関する問題）

② 生活習慣や学習環境に関する質問紙調査

- ・児童生徒に関する調査
- ・学校に関する調査

(5) 調査の方式

- | | | |
|------------------|------|----------|
| ・ 平成 19 年度～21 年度 | 悉皆調査 | 国語、算数・数学 |
| ・ 平成 22 年度 | 抽出調査 | 国語、算数・数学 |
- ※ 平成 23 年度は東日本大震災のため予定していた抽出調査を中止
- | | | |
|------------|------------|-------------|
| ・ 平成 24 年度 | 抽出調査 | 国語、算数・数学、理科 |
| ・ 平成 25 年度 | 全数調査（悉皆調査） | 国語、算数・数学 |

3 教科に関する調査について

【小学校国語】

(1) 小田原市の平均正答率と傾向

＜平均正答率＞

単位%

年度			小田原市	全国	平均正答率の 95%信頼区間	全国比
19	悉 皆 調 査	小学校国語 A	80.6	81.7		－1.1
		小学校国語 B	60.0	62.0		－2.0
20		小学校国語 A	62.4	65.4		－3.0
		小学校国語 B	47.4	50.5		－3.1
21		小学校国語 A	66.8	69.9		－3.1
		小学校国語 B	48.3	50.5		－2.2
22	抽 出	小学校国語 A	82.2	83.3	83.2～83.5	－1.1
		小学校国語 B	77.9	77.8	77.7～78.0	＋0.1
24		小学校国語 A	81.2	81.6	81.4～81.7	－0.4
		小学校国語 B	56.7	55.6	55.4～55.8	＋1.1
25	悉 皆	小学校国語 A	56.4	62.7		－6.3
		小学校国語 B	44.4	49.4		－5.0

※平均正答率の 95%信頼区間…平成 22・24 年度は抽出調査であり、悉皆調査を行った場合の平均正答率の範囲として文部科学省が算出したもので、その区間に入る確率が 95%であるもの。

＜全体の傾向＞

A 問題・B 問題ともに、全国と比べて低い。また、全国的に A 問題に比べて B 問題の正答率が低くなっているが、小田原市においても同様の結果である。

△…良好 ▼…課題 (全国比)

	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	言語事項 *
小学校国語 A	▼	▼	▼	
小学校国語 B			▼	▼

* 言語事項…伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項

(2) 主な出題から《小学校国語 A》

話すこと・聞くこと

7 スピーチの表現を工夫する

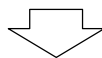
スピーチの表現を工夫することができるかどうかをみる。

小田原市正答率 31.5% 全国正答率 43.2% (無回答率 小田原 38.9% 全国 21.9%)

設問から、比喩法・列挙法・反復法・倒置法などの表現方法を区別した上で、それらの効果について適切に捉えることに課題があるといえる。さらに着目すべきは無回答率の高さである。1～5の選択肢から、二つ選んでその番号を書く出題にもかかわらず、4割近い児童が無解答である。確かに、本設問にはスピーチという言葉はなく、選手宣誓としていていることから、宣誓というスピーチの様子をイメージできない多くの児童がいることも考えられる。

しかしながら、文中には話し手というキーワードもあるので、しっかりと読むことができれば、スピーチの場面であることをイメージすることができるようになっていくことから、粘り強く問題を読むことが必要である。

改善のポイント



スピーチの表現を工夫する。そのためには、計画的に表現技法を取り入れたスピーチを行ったり、国語科のみならず日常的にスピーチを行ったりすること。

目的や意図に応じ、自分の考えが明確に伝わるように、スピーチの構成や表現を工夫することが大切である。また、スピーチをする際には、自分の立場や結論を明確にした上で全体の構成を工夫するとともに、事実と感想、意見とを区別して整理することが大切である。

(例) 1分間スピーチなどを計画的に行う

- A スピーチの話題を選ぶ ※聞く側の必然性を意識した話題・題材
- B スピーチ原稿の下書きをする ※事実と感想、意見とを区別して整理
- C 表現技法を工夫する
8つの表現技法（比喩法・列挙法・反復法・擬声法・倒置法・誇張・省略・対句）を黒板に掲示し、その中から表現技法を選択し、下書きを書き換える。
- D スピーチの練習をする
- E スピーチを行うとともに表現技法を中心に相互評価する

読むこと

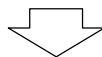
5 広告の特徴を捉える

広告を読み、編集の特徴を捉えることができるかどうかをみる。

- ア 小田原市正答率 52.1% 全国正答率 61.1%（無回答率 小田原 17.8% 全国 9.2%）
- イ 小田原市正答率 58.5% 全国正答率 71.7%（無回答率 小田原 20.3% 全国 10.3%）

様々なメディアがあふれているなか、それぞれのメディアの特性を踏まえた上で、編集の仕方などを捉えながら自分の考えを明確にすることは重要である。本設問では、広告を見て、考えたことをノートにまとめる場面が設定されているが、広告の編集の仕方にどのような特徴があるのかを、作り手と見る側のそれぞれの立場で考えながら読むことを苦手としている。また、ア・イの問題とも3つの選択肢から一つを選ぶものであるが無回答率が高い。

改善のポイント



広告などのメディアを読み、編集の特徴を捉えるとともに、日常生活における様々なメディアにふれる機会を設定すること。

日常生活における様々なメディアの情報を効果的に読むことが重要である。全国学力・学習状況調査において、メディアとして広告が取り上げられたのは初めてであるが、本設問のような広告をはじめ、新聞や雑誌、情報誌などを内容や形式の両面から注目して、様々なメディアにふれるとともに、それぞれの編集の特徴を捉えることができるように指導することが大切である。そして、メディアにはそれぞれのねらいに応じて様々な特徴があり、他のメディアはどうなっているのだろうと児童が興味をもてるようにすることも必要である。

(3) 主な出題から《小学校国語B》

読むこと

3 本や文章を読んで推薦文を書く＜新美南吉「ごんぎつね」＞

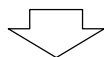
2人の推薦文を比べて読み、推薦している対象や理由を捉えるとともに、本や文章の読み方の違いを明確にすることができるかどうかをみる。

(3-イ)

小田原市正答率 35.8% 全国正答率 45.3% (無回答率 小田原 41.6% 全国 28.8%)

本や文章などのよさを相手に推薦することは、その内容について深く理解すると同時に、相手の要求や目的に合っていることが求められる。本設問では、2人の推薦文の違いに着目して読み比べているが、推薦文の書き手が、どのような本や文章を取り上げて推薦しているのか、推薦する人物やその理由はどのようなことかを捉えることを苦手としている。さらに、無回答率の高さも問題である。問題文の意味を捉え、自分の考えをもち、書き表すことができていないと考えられる。

改善のポイント



目的に応じて本や文章を読み、相手意識を明確にして文章を書く。

目的に応じて本や文章を読み、相手意識を明確にして文章を書くことが重要である。また、問題文を読み取り、自分の考えを書き表すことができていないことに関しては、国語科に限らず、普段の全ての授業において、児童一人一人が、題意を捉えて自分の考えを持つことができるよう、また必要に応じて書き表すことができるよう見届ける必要がある。

言語事項

2 目的や意図に応じてリーフレットを編集する＜打ち上げ花火の伝統＞

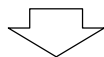
目的や意図に応じ、必要な内容を適切に書き加えることができるかどうかをみる。

(2設問一)

小田原市正答率 58.8% 全国正答率 63.8% (無回答率 小田原 6.3% 全国 4.4%)

本設問では、接続後の意味と役割を適切に捉えながら、文章の中から必要な情報を取り出し、1文に整えて書くことが求められる。しかし、「いろいろな花火を作れるようになった」のように、「さまざまな色や明るさ」という必要となる言葉を、的確に取り出してかけていないものが多い。

改善のポイント



文と文の意味のつながりを考えながら、内容を簡潔に書く。

目的や意図に応じ、文と文との意味のつながりを考えながら、複数の文を1文にまとめるなどして、内容を簡潔に書くことが重要である。反対に、複文や重文などの1文を、複数の文に書き分けることができるよう指導することも重要である。いずれの場合にも、主語と述語との関係や、文と文とをつなぐ指示語などを適切に使うことができるようにすることが大切である。

【中学校国語】

(1) 小田原市の平均正答率と傾向

<平均正答率>

単位%

年度			小田原市	全国	平均正答率の 95%信頼区間	全国比
19	悉 皆 調 査	中学校国語 A	79.7	81.6		－1.9
		中学校国語 B	70.0	72.0		－2.0
20		中学校国語 A	72.1	73.6		－1.5
		中学校国語 B	58.9	60.8		－1.9
21		中学校国語 A	75.3	77.0		－1.7
		中学校国語 B	72.5	74.5		－2.0
22	抽 出	中学校国語 A	74.8	75.1	75.0～75.2	－0.3
		中学校国語 B	63.0	65.3	65.1～65.5	－2.3
24	調 査	中学校国語 A	74.5	75.1	75.0～75.2	－0.6
		中学校国語 B	62.9	63.3	63.2～63.4	－0.4
25	悉 皆	中学校国語 A	75.2	76.4		－1.2
		中学校国語 B	68.1	67.4		＋0.7

※平均正答率の 95%信頼区間…平成 22・24 年度は抽出調査であり、悉皆調査を行った場合の平均正答率の範囲として文部科学省が算出したもので、その区間に入る確率が 95%であるもの。

<全体の傾向>

A 問題・B 問題ともに、全国とほぼ同程度である。中学校国語 B では 4 領域の平均正答率も全国とほぼ同程度であった。

△…良好 ▼…課題 (全国比)

	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	言語事項 *
中学校国語 A				▼
中学校国語 B				

* 言語事項…伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項

(2) 主な出題から《中学校国語 A》

書くこと

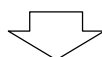
③ 報告する文章を書く

文の接続に注意し、伝えたい事柄を明確にして書く。(③設問二)

小田原市正答率 48.4% 全国正答率 48.8%

報告する文章を書く際に、出された意見を整理して、決定の理由を適切に書くものである。
【選考会で出された意見】を踏まえての内容を書くことができない生徒や、後に続く部分とのつながりを考えて書くことができない生徒が半数近くいたと考えられる。なお、無解答率は 5.9 パーセントであった。

改善のポイント



目的に応じて情報の取り上げ方や書き方を工夫して書く力を身につけるために、日頃から新聞等からモデルとなる文章を提示することや、互いに文章を読みあい、助言し合う学習活動を積み重ねていく。間違いを恐れずに書くこと、さらに、自分の書いた文章に対しての意見や助言によって気付かされたことを、自分の表現に役立てようとするのが重要である。

言語事項

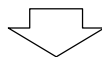
8 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項等

語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使うことができるかどうかをみる。(8設問三)

小田原市正答率 41.4% 全国正答率 46.6%

語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使うものである。誤答である「平衡」を選択した生徒が正答率を上回った。正答の「閉口する」という表現になじみがなかったり、「平衡」の熟語の意味を理解していなかったりするものと考えられる。

改善のポイント



言葉への関心を高め、言語感覚を豊かにするために、辞書等を使って、なじみの薄い語句や使用頻度の低いと思われる漢字などを積極的に調べる機会を意図的に設けるとすることが必要である。さらに、調べたことを「話すこと・聞くこと」「書くこと」に生かしていくような指導の工夫も重要である。

(3) 主な出題から《中学校国語 B》

書くこと

読むこと

1 説明的な文章を読む（いろはかるた）

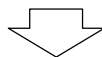
課題を決め、それに応じた情報の収集方法を考えることができるかどうかをみる。

(1設問三)

小田原市正答率 59.7% 全国正答率 57.9%

ア：文章から「かるた」についてわかったことを書く、イ：アについてさらに調べたいことを書く、ウ：調べる手段を選択し、どのように調べるかを 20 字以上 50 字以内で書くものである。興味をもったことから課題を決め、それに応じた情報の収集方法を考えることに課題があると考えられる。

改善のポイント



課題を解決するために情報を収集する際には、情報を収集する手段の特徴を理解し、自分の課題の解決に適した手段を選び、見通しを持って情報を集める必要がある。そのためには、それぞれの手段の特徴について考える場面を設定することや、自分の課題を解決する具体的な手順を考え、それについて検討し合うなどの学習活動の工夫が重要である。

【小学校算数】

(1) 小田原市の平均正答率と傾向

＜平均正答率＞

単位%

年度			小田原市	全国	平均正答率の 95%信頼区間	全国比
19	悉 皆	小学校算数 A	80.5	82.1		－1.6
		小学校算数 B	61.4	63.6		－2.2
20		小学校算数 A	71.6	72.2		－0.6
		小学校算数 B	50.0	51.6		－1.6
21		小学校算数 A	76.9	78.7		－1.8
		小学校算数 B	54.1	54.8		－0.7
22	抽 出	小学校算数 A	73.3	74.2	74.0～74.4	－0.9
		小学校算数 B	48.1	49.3	49.1～49.5	－1.2
24		小学校算数 A	72.0	73.3	73.1～73.5	－1.3
		小学校算数 B	60.7	58.9	58.7～59.1	＋1.8
25	悉 皆	小学校算数 A	73.7	77.2		－3.5
		小学校算数 B	53.5	58.4		－4.9

※平均正答率の 95%信頼区間…平成 22・24 年度は抽出調査であり、悉皆調査を行った場合の平均正答率の範囲として文部科学省が算出したもので、その区間に入る確率が 95%であるもの。

＜全体の傾向＞

A 問題・B 問題ともに、全国平均よりも約 5 ポイント低い数値となっている。また、どの設問においても、無回答率が全国平均よりも高い数値となっている。

△…良好 ▼…課題 (全国比)

	数と計算	量と測定	図形	数量関係
小学校算数 A		▼	▼	
小学校算数 B	▼	▼		▼

(2) 主な出題から《小学校算数 A》

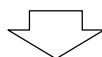
数と計算

2 四捨五入で数を適切に処理する方法について理解しているかどうかをみる。

小田原市正答率 49.8% 全校正答率 60.2%

示された位までの概数にする際、一つ下の位の数を四捨五入して処理する方法について理解することに課題がある。この設問では、千の位を四捨五入すべきところを、百の位を四捨五入し、次に千の位を四捨五入して 20000 と処理したものと考えられる。

改善のポイント

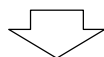


四捨五入して指定された概数になる数の範囲を捉え、概数を的確に用いることができるようにすることが大切である。指導にあたっては、例えば、千の位を四捨五入して 20000 になる数の範囲を考える際に、数直線に表す過程を大切にすることにより、15000 以上 25000 未満の範囲であれば、どのような数でも千の位を四捨五入すると 20000 になることや、14500 や 25000 が条件の範囲外であることを理解できるようにすることが考えられる。

- 4 異種の二つの量の割合としてとらえられる数量について、その比べ方や表し方を理解しているかどうかをみる。 小田原市正答率 44.1% 全国正答率 50.0%

A 問題の中では、最も正答率が低い問題であった。与えられた A、B の式が 1 m^2 あたりの人数で比んでいるという式であるにもかかわらず、一人あたりの面積を求める式であると捉えているものが、解答として多かった。単位量あたりの大きさを求める除法の式の意味を理解できていないと考えられる。また、求めた商の意味を理解できていないと考えられる回答もあった。

改善のポイント



混み具合を調べる場合には、単位面積あたりの人数で比べる場合と、単位人数あたりの面積で比べる場合があるので、どちらを単位量として設定しているかについて判断できるようにすることが大切である。例えば、本問題では、「 $12 \div 6$ 」という式の意味を表の中の数値と対応させることで、「人数 $\div$ 面積」と捉え、 1 m^2 あたりの人数を求めている場面であることを理解することが大切である。指導にあたっては、図をもとにして、何を求めているのかを理解できるようにすることが考えられる。また、図をもとに式を読み取る活動も必要である。

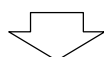
図形

- 7 (2) 円柱について、底面の円周の長さと言開図の側面の辺の長さとは対応していることを理解しているかどうかをみる。

小田原市正答率 56.2% 全国正答率 66.3% (無回答率 小田原 10.3% 全国 5.7%)

円柱について、底面の円周の長さと言開図の側面の辺の長さとは対応していることを理解することに課題がある。A 問題の中で無回答率が最も高いほか、問題場面にある数値「6」「8」「3.14」をそのまま用いて式を書いたものが見られた。

改善のポイント



見取り図と言開図とを関連づけて情報を読み取り、筋道を立てて考え、問題を解決することが大切である。指導にあたっては、例えば本設問を用いて、辺の長さを求めるために必要な情報について話し合う活動を取り入れることが考えられる。また、ノート等に求め方を記述し、説明する活動を取り入れることも考えられる。

(3) 主な出題から《小学校算数 B》

量と測定 数量関係

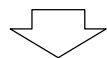
- 2 (3) 表から数値を適切に取り出して、二つの数量の関係が比例の関係でないことを数と言葉を用いて記述できるかどうかをみる。

小田原市正答率 30.3% 全国正答率 35.2% (無回答率 小田原 26.2% 全国 19.0%)

表から数値を適切に取り出して、二つの数量の関係が比例の関係でないことを数と言葉を用いて記述することに課題がある。表の数値を根拠として説明できていない解答があった。

また、A・B 問題合わせて一番無解答率が高かった設問だが、問題で示されている比例になっていないことの説明が解釈できなかったり、その説明より詳しく記述する方法が分からなかったりしたことが要因だと考えられる。

改善のポイント



二つの数量の対応や変化の様子を明らかにするためには、二つの数量の関係を表にまとめたり、表から規則性を読み取ったりすることが大切である。その際、見出した規則がいつでも成り立っているかについて表の数値を示して説明することが重要である。指導にあたっては、基準となる表の数値を設定し、それをもとにして、対応や変化の規則性を説明する活動を充実することが考えられる。また、1 以外を基準にすることや、二つの数量の関係が比例でない場合も取り上げ、根拠を明確にして説明することも考えられる。

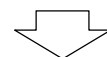
量と測定

3 (2) 示された分け方で二つの三角形の面積が等しくなることを、言葉と数を用いて記述することができるかどうかをみる。

小田原市正答率 36.9% 全国正答率 42.8% (無回答率 小田原 22.9% 全国 15.6%)

示された分け方で二つの三角形の面積が等しくなることを、言葉と数を用いて記述することに課題がある。三角形の底辺や高さにあたる長さを、正確に捉えられていないと考えられる。また、示された考えを用いることができなかったりどこに着目したらよいかわからなかったりしたことが、無回答率の高かった要因になったと考えられる。

改善のポイント



授業では、一つの問題について、いろいろな考え方や解決方法を発表し合うことを通して、他者の発言や記述内容をもとに、解決方法や用いられた考え方を理解したり、表現のよさに気付いたりすることが必要である。指導にあたっては、形が違う複数の図形の中から、面積が等しいかどうか判断し、そのわけを説明する活動を取り入れることが考えられる。その際、底辺や高さに着目したり面積を求める式を比べたりするなど、用いられた考え方を理解し、根拠となる長さを示すことのよさに気付くことができるようにすることが大切である。

【中学校数学】

(1) 小田原市の平均正答率と傾向

<平均正答率>

単位%

年度			小田原市	全国	平均正答率の 95%信頼区間	全国比
19	悉皆	中学校数学 A	68.3	71.9		－3.6
		中学校数学 B	58.2	60.6		－2.4
20		中学校数学 A	61.8	63.1		－1.3
		中学校数学 B	47.9	49.2		－1.3

21		中学校数学 A	61.4	62.7		－1.3
		中学校数学 B	56.4	56.9		－0.5
22	抽 出	中学校数学 A	63.7	64.6	64.4～64.8	－0.9
		中学校数学 B	42.5	43.3	43.1～43.5	－0.8
24	調 査	中学校数学 A	61.1	62.1	62.0～62.3	－1.0
		中学校数学 B	50.4	49.3	49.2～49.5	＋1.1
25	悉 皆	中学校数学 A	62.5	63.7		－1.3
		中学校数学 B	40.9	41.5		－0.6

※平均正答率の95%信頼区間…平成22・24年度は抽出調査であり、悉皆調査を行った場合の平均正答率の範囲として文部科学省が算出したもので、その区間に入る確率が95%であるもの。

＜全体の傾向＞

A問題・B問題ともに、全国平均を若干下回っている。これは悉皆調査だった平成20、21年度とほぼ同じ傾向である。記述問題については、無回答率が半数近くにのぼっている。

△…良好 ▼…課題（全国比）

	数と式	図形	数量関係	資料の活用
中学校数学 A				▼
中学校数学 B		△		

（2）主な出題から《中学校数学A》

資料の活用

14（2）平均値の意味・ヒストグラム

与えられたヒストグラムについて、ある階級の相対度数を求めることができるかどうかをみる。

小田原市正答率 18.9% 全国正答率 22.8%（無回答率 小田原 28.4% 全国 25.1%）

ヒストグラムから読み取った度数をそのまま解答したり、ヒストグラムから読み取った数値をそのまま解答としたりする場合があった。正答状況、誤答状況、無回答率からみて、相対度数の意味を理解していない生徒が相当数いると考えられる。

改善のポイント



資料の傾向を読み取る活動を行う際に、ある階級の度数が総度数に占める割合を求めて、相対度数の必要性和意味についての理解を深められるようにする指導をすることが大切である。生徒にとって身近な場面で、資料を収集して、その資料の傾向を調べる際、総度数が異なる場合が多い。意図的にそのような場面を取り上げ、階級の度数をそのまま比較することが適切でないことを実感できるようにすることで、相対度数の必要性和意味について理解できるよう指導することが考えられる。

（3）主な出題から《中学校数学B》

資料の活用

5 (2) 情報の適切な表現と判断

資料の傾向を的確に捉え、事柄の特徴を数学的に説明することができるかどうかをみる。

小田原市正答率 21.0% 全国正答率 24.8% (無回答率 小田原 46.2% 全国 43.1%)

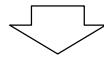
誤答としては、主部や述部の記述が不十分であったり誤りがあったりするものが多かった。

誤答例として、「学級の生徒が美しいと思う長方形は、1.5 倍以上 1.7 倍未満である。」

というものがある。このように記述した生徒は、ヒストグラムの「最も度数が大きい階級に着目することはできたが、その特徴である「1.5 倍以上 1.7 倍未満の階級の度数がすべての階級の中で最も大きい」ことを記述しなかったと考えられる。

過去4年間、各領域を通しての課題として「予想した事柄を数学的な表現を用いて説明すること」について取り上げられており、今回の結果から小田原市でも引き続き課題があると考えられる。

改善のポイント



不確定な事象についての問題を解決できるようにするために、目的に応じて資料を分類整理し、資料の傾向を捉えたり、整理のしかたを工夫することで、資料の傾向を捉え直したりすることができるように指導することが大切である。

また、資料の傾向を読み取って分かった事柄を数学的に説明できるように指導することも大切である。そのために、前提に当たる部分（主部）と、それによって説明される結論に当たる部分（述部）を明確にして表現する場面を設定することが考えられる。

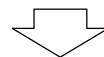
数と式

6 (3) 事象を数学的に表現したり、数学的に表現された結果を事象に即して解決したりすることを通して、事柄が成り立つ理由を筋道立てて説明することができるかどうかをみる。

小田原市正答率 22.6% 全国正答率 24.1% (無回答率 小田原 47.1% 全国 43.2%)

ある具体的な事柄について、式が成り立つ理由を筋道立てて説明することに課題がある。過去4年間、各領域を通しての課題として「事柄が成り立つ理由を説明すること」について取り上げられており、今回の結果から小田原市でも引き続き課題があると考えられる。また、小田原市では、数学 A・B 合わせて一番無回答率が高く、題意をよく考えて解くということにも課題があると考えられる。

改善のポイント



数量の関係を式に表し、その式を事象に即して説明できるように指導することが大切である。例えば、式の一部が表す具体的な事象を読み取る場面を設定していくことが考えられる。

また、事象を多面的に見ることができるように指導することが大切である。そのためには、問題解決に必要な視点をつまらかにし、それを基に事象を考察し、様々な式を見いだすとともに、見いだした式を基に事象を振り返る活動を取り入れることが考えられる。

4 児童・生徒質問紙調査について

○…概ね良好な傾向が見られる項目 □…課題の見られる項目

*以外の数値…「当てはまる」「どちらかと言えばあてはまる」等肯定的な回答の割合の合計

小学校

(1) 学習に対する関心・意欲・態度等

○ 多くの児童が①「国語・算数の勉強は大切である」、②「国語・算数の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つ」と回答している。

(① 国語：市 91.9% 全国 91.0% 算数：市 91.9% 全国 92.1%)

(② 国語：市 87.8% 全国 87.2% 算数：市 88.9% 全国 88.8%)

○ ①「普段の授業では、自分の考えを発表する機会が与えられている」②「普段の授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行なっている」と回答する児童が多い。

(① 市 82.9% 全国 81.5% ② 市 82.7% 全国 79.3%)

□ ①「読書は好きである」と回答する児童の割合は昨年度より 10 ポイント増えているが、②「1 日あたり 30 分以上読書している」児童の割合は約 1/3 に留まっている。

(① 市 72.7% 全国 72.1% ②* 市 34.6% 全国 36.6%)

(2) 家庭での学習習慣

□ 「普段、学校の授業時間以外に 1 日当たり 1 時間以上勉強する」児童の割合は昨年度とほぼ同様であるが、全国平均と比較すると 10 ポイント近く低い。(※ 市 48.5% 全国 57.4%)

○ 昨年度と同様、「家で学校の宿題をしている」児童は多い。(市 95.0% 全国 96.4%)

□ ①「家で自分で計画を立てて勉強をしている」、②「家で学校の授業の予習や復習をしている」児童は少ないが、「している」と回答する割合は昨年度より増えた。

(① 市 55.4% 全国 58.9% ②予習：市 44.6% 全国 41.3% 復習：市 50.6% 全国 51.4%)

(3) 学校生活

○「学校で友達に会うのは楽しいと思っている」児童の割合は多く、昨年度より増加した。

(市 96.1% 全国 96.0%)

(4) 基本的生活習慣

○ ①「朝食を毎日食べている」児童の割合は昨年度より増加した。しかし、②「あまり食べていない」児童もいることは課題である。

(① 市 96.5% 全国 96.3 % ② 市 3.5% 全国 3.7%)

□ 就寝時刻が 10 時前と回答した児童の割合は昨年比べて約 10 ポイント増えている。

(※午後 10 時前に就寝 市 47.8% 全国 47.1%)

□ 1 日に 2 時間以上①「テレビやビデオ・DVD を見たり、聞いたりする」児童や②「テレビゲームをする」児童が多く、どちらも昨年よりも増加している。

(①* 市 67.5% 全国 62.5% ②* 市 32.8% 全国 28.2%)

□ 携帯電話やスマートフォンの使い方について、家の人と約束したことを守っていますか

(市 40.0% 全国 39.8%)

(5) 家庭でのコミュニケーション

○ ①「家の人と普段、夕食を一緒に食べている」児童は多いが、昨年度より減少している。

しかし、②「家の人と学校での出来事について話をする」児童も多く、昨年度より増加している。(市 90.0% 全国 89.0% ②市 76.6% 全国 76.5%)

(6) 社会に対する興味・関心

- ☐ ①「地域や社会で起こっている問題や出来事などに関心がある」児童や②「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある」児童の割合は低い。

(① 市 54.3% 全国 57.4% ② 市 32.9% 全国 38.6%)

- ☐ 「今住んでいる地域の行事に参加している」児童の割合は低く全国平均と比較しても 10 ポイント低いが、昨年度より 18 ポイント増加している。(市 53.3% 全国 63.9%)

(7) 自尊意識・規範意識等

- ☐ 「自分にはよいところがある」児童が多い。(市 74.7% 全国 75.7%)

- ☐ 「ものごとを最後までやりとげて、うれしかったことがある」児童が多い。

(市 94.6% 全国 94.3%)

- ☐ 「学校のきまりを守っている」児童は多い。(市 90.9% 全国 90.6%)

- ・ ①「人の気持ちが分かる人間になりたい」、②「いじめは、どんな理由があってもいけない」、③「人の役に立つ人間になりたい」と思っている児童は多い。昨年度数値に比較して、①は若干の増加、②③については若干の減少となっている。

(① 市 92.6% 全国 93.0% ②市 95.8% 全国 95.9% ③市 93.3% 全国 93.6%)

中学校

(1) 学習に対する関心・意欲・態度

- ☐ 昨年度より若干減少したが、多くの生徒が、①「国語の勉強は大切であり」、②「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つ」と回答している。

(① 市 88.6% 全国 88.4% ②市 81.6% 全国 81.4%)

- ☐ 国語の授業について、次のように回答している生徒の割合は、昨年に比べて減少している。

- ・ 国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている

(H24 市 66.8% → H25 市 59.7%)

- ・ 国語の授業で意見等を発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している

(H24 市 58.9% → H25 市 54.4%)

- ・ 国語の授業で文章を読む際、段落や話のまとまりごとに内容を理解しながら読んでいる

(H24 市 72.4% → H25 市 66.9%)

- ☐ ①「数学の勉強は大切だと思っている」生徒、また、②「数学ができるようになりたいと思っている」生徒は昨年度と同様に多い。

(① 市 80.7% 全国 80.5% ②市 90.3% 全国 90.8%)

- ☐ 「読書は好きである」と比較的多くの生徒が回答している。(市 73.9% 全国 70.1%)

- ・ 本を読んだり、借りたりするために、週に 1 回以上学校図書館・室や地域の図書館に行く生徒が増加している。(※ H24 市 4.3% → H25 市 6.7%)

(2) 学習時間等

- ☐ 「普段、学校の授業時間以外に 1 日当たり 1 時間以上勉強する」生徒の割合が昨年度より減少している。

(H24 市 84.2% → H25 市 81.6%) (H24 全国 83.3% → H25 全国 85.2%)

- 昨年度と同様、「家で学校の宿題をしている」生徒は多い。(市 82.3% 全国 86.8%)

(3) 学校生活

- 昨年度と同様、「学校で友達に会うのは楽しいと思っている」生徒が多い。

(市 94.4% 全国 94.5%)

(4) 基本的生活習慣

- 昨年度と同様、①「朝食を毎日食べている」生徒の割合が多い。「あまり食べていない」生徒もいることは課題であるが、②全く食べていない生徒が昨年度より減少している。

(① H24 市 91.6% → H25 市 91.9% ② H24 市 2.4% → H25 市 1.9%)

- 昨年度と同様、「毎日同じくらいの時刻に起きている」生徒が多い。

(市 90.8% 全国 92.3%)

- 就寝時刻が午前0時以降の生徒の割合は昨年度より減少しているが多い。

(※ 午前0時以降に就寝 市 25.5% 全国 23.5%)

- 昨年度と同様、1日に2時間以上①「テレビやビデオ・DVD を見たり、聞いたりする」生徒、②「テレビゲームをする」生徒は多い傾向にある。

(※ ① 市 61.0% 全国 55.5% ② 市 33.3% 全国 27.5%)

(5) 家庭でのコミュニケーション

- ①「家の人と普段、夕食を一緒に食べる」生徒は、昨年度より増加傾向にあり、②「家の人と学校での出来事について話をする」生徒の割合は減少傾向にある。

(① H24 市 78.6% → H25 市 81.4% ② H24 市 66.1% → H25 市 63.7%)

(6) 社会に対する興味・関心

- 「地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がある」生徒の割合は低い。

(市 51.0% 全国 51.8%)

- 「今住んでいる地域の行事に参加している」生徒の割合は低く昨年度とほぼ同程度である。

(市 36.7% 全国 41.6%)

(7) 自尊意識・規範意識等

- 「自分には、よいところがあると思う」生徒が多い。

(市 67.9% 全国 66.4%)

- 「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことのある」生徒が多い。

(市 92.6% 全国 93.7%)

- 「学校の規則を守っている」生徒が多い。

(市 89.2% 全国 92.5%)

- ・ ①「人の気持ちが分かる人間になりたい」、②「いじめは、どんな理由があってもいけない」、③「人の役に立つ人間になりたい」と思っている生徒が多い。

(① 市 91.8% 全国 94.2% ②市 92.0% 全国 93.5% ③市 91.3% 全国 93.3%)

本市の児童生徒のほとんどは、学校に行くのが好きで、友達に会うことが楽しいと感じている。一方で約4～5%の児童生徒は、学校に行くことを楽しいとは考えておらず、この項目に関しては、100%を目指して市としての教育を行っていく必要がある。

まず、学習への関心・意欲については、国語や算数・数学など、どれもほぼ全国平均並みであるといっていよい。小学校では、自分の考えの発表やグループでの話し合い活動など、言語活動を取り入れた授業が全国平均以上に行われており、学習指導要領で重視されている思考力、判断力、表現力の育成を目指した授業が充実しているようである。一方で中学校では、国語の授業において、自分の考えを話したり書いたりすること、自分の考えがうまく伝わるように工夫することが、昨年度より5～7%も低くなっており、心配である。小学校、中学校とも、学習指導要領の示す「確かな学力」の定着をめざし、より一層の努力が求められる。

読書が好きであると答えた小学生は、昨年度よりも10ポイント増え、ほぼ全国平均にならんだ。中学生では昨年同様、全国平均を上回っており、多くの学校で取組まれている「読書タイム」等が読書のきっかけとなっていると思われる。

次に家庭での学習については、学校の授業以外で1日1時間以上勉強するという小学生は53%と低く、全国より10ポイントも低くなっている。その反面、家で学校の宿題をしている小学生は約95%と多く、全国平均並みであり、宿題だけは行っているが、それ以外の学習には、あまり取り組まれていない。中学生では、学校の授業以外で1日1時間以上勉強しているのが82%と、小学生より高いが、これは塾での勉強が数値に表れているものと考えられ、学校の宿題の取り組みとなると、小学生よりも約13ポイントも低い数値である。また、中学生の学校外での学習時間については、昨年度全国平均並みであったものが、今回は全国を4ポイント下回り、家庭学習の更なる定着を目指した取組みが必要である。

児童生徒の生活習慣に目を向けると、小学生で約96.5%、中学生で約92%とほとんどの児童生徒が毎日朝食をとっている。就寝時刻については、小学生の午後10時前就寝が約10ポイント増え、中学生とともに全国平均並みである。しかし、中学生の約25%が0時以降の就寝ということで、寝不足の状態に登校している生徒が多いのは心配である。中には、寝不足で朝食抜きという生徒もいると思われる。夕食については、小学生で約90%、中学生で約80%が家族とともに食べており、全国平均並みであるが、逆に言えば10～20%の児童生徒が家族と一緒にの食事を取っておらず、家庭環境の複雑化、多様化を示す数値であり、今後の動向にも注視したい。

テレビやゲームに費やす時間については、小学生、中学生ともに全国平均を上回っている状態が昨年度同様続いており、これが家庭学習の時間を減少させる要因につながっていると思われる。

地域や社会の出来事に対する関心については、小学生、中学生ともに約50%が関心を持っており、全国並みであるが、地域の行事の参加については、小学生、中学生とも5～10ポイントも全国平均を下回っている。小学生の子ども会加入率の低下や、学習塾や部活動などが平日の放課後や休日の過ごし方の大部分を占めている中学生の現状を反映している。児童生徒のコミュニティの中心が「地域の仲間」から、自分の所属している「習い事や部活動での仲間」に移行しつつある中、この傾向は今後も続いていくと思われる。このような現状がある中、学習指導要領では地域との連携により「生きる力」を育むことも重要視しており、その具体策を明確にしていく必要がある。

児童生徒の自尊意識や規範意識については、どの項目も全国並みであるといえる。ものごとの達成感を感じたことのある児童生徒は90%以上いるが、それが自尊感情となると、60～70%に下がり、思春期特有の傾向であるとも考えられるが、それでも成し遂げたことへの自信をもっと自尊感情につなげたい。学校や地域、家庭が協力して、成し遂げたことへの評価を様々な形で行っていき、児童生徒の自尊感情や自己有用感を更に高めていく必要がある。いじめに関する意識は90～95%

の児童生徒が高い意識を持つようになっており、日頃の学校教育の成果が表れていると考えられるが、引き続き、100%を目指して市としての教育を行っていく必要がある。

今回の調査は、昨年度までの抽出調査と違い、悉皆調査で行われたため、小田原の児童生徒の実態がよく表れている。全体的に見て、小田原の児童生徒は、質問紙調査からは、どの項目も全国から大きく離れているものはなく、平均並みと考えられる。朝食をしっかりとることや読書や宿題に取り組む習慣、いじめに対する意識など、高い数値を見せるものも多く、「おだわらっ子の約束」に関連の深い項目が高い数値を示しているものも見られる。その一方で、テレビやゲームの時間、地域行事への参加率の低さ、家庭学習の時間などの課題も浮彫りとなった。

本市では、今回の結果を踏まえ、学習指導要領の内容は勿論のこと、「小田原市学校教育振興基本計画」をもとに、これからも小田原独自のよさを活かした教育を展開していきたい。

5 学校質問紙調査結果について

○…概ね良好な傾向が見られる項目 □…課題の見られる項目

(小) …小学校について

(中) …中学校について

*全国・市の数値は、「そのとおりだと思う」「どちらかといえばそう思う」など、肯定的な回答の割合の合計

(1) 学習への姿勢

□ 児童は「熱意をもって勉強している」と回答している学校が少ない。

(小学校：市 84.0%・・・昨年度比－16% 全国 92.4%)

○ 生徒は「熱意をもって勉強している」と回答している学校が多い。

(中学校：市 100.0% 全国 88.5%)

□ (中)「授業中の私語がなく落ち着いている」と回答している学校が全国に比べて少ない。

(市 91.0% 全国 92.7%)

(2) 児童・生徒の礼節

○ 「学校や地域であいさつするよう指導している」と全ての学校が回答している。

(小学校：市 100.0% 全国 99.51% 中学校：市 100.0% 全国 99.3%)

(3) 学校での学習指導の取組

○ (小)「話し合い活動で自分の考えを相手にしっかり伝える」「相手の考えを最後まで聞く」は、全国に比べて高い。

(伝える・・・市 76% 全国 67.8% 聞く・・・市 88% 全国 83%)

(中)「話し合い活動で自分の考えを相手にしっかり伝える」は全国と変わらないが、「相手の考えを最後まで聞く」は全国に比べて高い。

(聞く・・・市 90.9% 全国 82.6%)

○ (小)「放課後」や「土曜日」に利用した補充的な学習サポートは少ないが「長期休業期間を利用した補充的な学習サポートを実施している」学校が全国と比べて多い。

(市 72.0% 全国 65.3%)

○ (中)「放課後」や「土曜日」に利用した補充的な学習サポートは行っていないが、「長期休業期間を利用した補充的な学習サポートを実施している」学校が全国と比べて多い。

(市 90.9% 全国 84.4%)

- (小)「児童に対して、本やインターネットなどを使った資料の調べ方が身につくよう指導している」学校が全国と比べて少ない。
(市 88.0% 全国 91.3%)
- (中)「生徒に対して、本やインターネットなどを使った資料の調べ方が身につくよう指導している」学校が、昨年度より増加しているものの全国と比べて少ない。
(市 72.7% 昨年度比+32.7% 全国 76.3%)
- (小)「児童・生徒の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしている」は全国よりは高いが、昨年度よりも減少している。
(小学校：市 96.0% 昨年度比-4% 全国 95.1%)
- (中)全ての学校が「児童・生徒の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしている」と回答している。
(中学校：市 100.0% 全国 93.3%)
- 「資料を使って発表ができるよう指導した」は全国と比べて多い。
(小学校：市 92.0% 全国 86.3% 中学校：市 90.9% 全国 76.8%)
- (小)「コンピュータ等の基本的操作を身につける指導を行った」は全国に比べて少ない。
(市 64.0% 全国 89.8%)
- (中)すべての学校が「コンピュータ等の基本的な操作を身につける指導を行った」と回答している。
(市 100.0% 全国 92.1%)
- (小)国語の指導として、①「書く習慣をつける授業を行っている」、②「漢字・語句など基礎的・基本的な事項を定着させる授業」が全国に比べて少ない。
(①市 80.0% 全国 90.0% ②市 92.0% 全国 96.8%)
- (中)国語の指導として、「書く習慣をつける授業を行っている」が全国に比べて少ない。
(市 72.8% 全国 92.3%)
- (中)すべての学校が、国語の指導として、「漢字・語句など基礎的・基本的な事項を定着させる授業」を行っている。
(市 100.0% 全国 98.0%)
- (小)全ての学校が、算数の指導として、「計算問題などの反復練習をする授業を行っている」と回答している。
(小学校：市 100.0% 全国 97.2%)
- (中)数学の指導として、「計算問題などの反復練習をする授業を行っている」は全国に比べて少ない。
(中学校：市 81.9% 全国 95.6%)
- (小)国語の指導として「発展的な学習の指導」は全国に比べて少ない。
(市 32.0% 全国 37.6%)
- (中)国語の指導として「発展的な学習の指導」は全国に比べて多い。
(市 72.7% 全国 53.7%)
- (小)算数の指導として①「発展的な学習の指導」、②「実生活における事象との関連を図った授業」は全国と比べて多い。

(①市 64.0% 全国 54.5% ②市 76.0% 全国 63.0%)

- (中) 数学の指導として「発展的な学習の指導」は全国に比べて少なく、昨年度よりも減少している。

(市 54.5% 昨年度比-25.5% 全国 58.3%)

- 全ての学校で「朝読書などの一斉読書の時間を設けている」と回答している。

(小学校：市 100.0% 全国 98.5% 中学校：市 100.0% 全国 93.8%)

(4) 全国学力・学習状況調査の活用

- 全国学力・学習状況調査の問題冊子等や独自の調査等の結果を利用し①「具体的な教育指導の改善等」、②「学校全体で教育活動を改善するために活用」は、全国と比べて少ない。

(小学校：①市 48.0% 全国 92.3% ②市 44.0% 全国 88.9%)

(中学校：①市 62.6% 全国 89.0% ②市 54.5% 全国 85.1%)

(5) 家庭との連携・開かれた学校

- 「ボランティア等による授業サポート（補助）」を行っている学校が全国と比べて非常に多い。

(小学校：市 92.0% 全国 42.4% 中学校：市 72.7% 全国 22.8%)

- ほとんどの学校が①「PTAや地域の人が学校の諸活動にボランティアとして参加してくれている」②「学校支援ボランティアの仕組みにより、保護者や地域の人が学校における教育活動や様々な活動に参加していただいている」と回答している。

(①小学校：市 100.0% 全国 97.2% 中学校：市 100.0% 全国 94.7%)

(②小学校：市 100.0% 全国 81.0% 中学校：市 90.9% 全国 65.6%)

- 「学校の教育活動の情報について、情報提供のためのホームページの更新」を一昨年度、学期に1回以上行った学校が全国と比べて少ない。

(小学校：市 56.0% 全国 78.9% 中学校：市 54.6% 全国 76.0%)

- (小) 国語の指導として①「家庭学習の課題を与えた」、②「家庭学習の与え方について教職員で共通理解を図った」③「その評価や指導を行っている」学校が全国と比べて少ない。

(国語：①市 96.0% 全国 99.6% ②市 80.0% 全国 87.7% ③市 92.0% 全国 97.0%)

- (小) 算数の指導として、すべての学校で「家庭学習の課題を与えた」と回答している。

(市 100.0% 全国 99.8%)

- (中) 国語・数学の指導として、①「家庭学習の課題を与えている」②「保護者に対して生徒の家庭学習を促すよう働きかけを行っている」は、全国と比較して低い。

(国語：①市 72.7% 全国 89.7% ②市 45.5% 全国 72.0%)

(数学：①市 54.6% 全国 92.7% ②市 54.6% 全国 72.7%)

(6) 教育環境

- ①「司書教諭の配置」②「学校司書等の配置」の割合は、特に中学校は全国と比べて多い。

① (小学校：市 64.0% 全国 60.0% 中学校：市 81.8% 全国 58.4%)

② (小学校：市 64.0% 全国 49.5% 中学校：市 81.8% 全国 48.2%)

(7) その他

- すべての学校で「学校評価を教育活動その他の学校運営の改善に結びつけることができている」と回答している。

(小学校：市 100.0% 全国 98.6% 中学校：市 100.0% 全国 98.1%)

- (小)「テーマを決め、講師を招聘する校内研修や、事例研究などの実践的な研修を行っている」学校が多い。

(市 96.0% 全国 92.7%)

- 昨年度と同様、「授業研究を伴う校内研修」を年間 5 回以上行っている学校が多い。

(小学校：市 100.0% 全国 85.3% 中学校：市 100.0% 全国 61.8%)

児童・生徒の姿勢や礼節については、「私語をしない」「話している人の方を向いて聞く、聞き手に向かって話をする」など、授業の中で学習規律の徹底を図った指導が定着し、落ち着いて学習に取り組む姿勢がみられ、自分の考えを相手にしっかり伝えることや相手の考えを最後まで聞くことができていることや、学校や地域であいさつをすることにおいて、成果があらわれていると感じている。さらに、児童・生徒が熱意を持って勉強できるよう指導している。

学校での学習指導の取組については、新しい学習指導要領の趣旨に沿った学習が展開されており、習得した知識・技能を活用する学習へと発展した学習活動に向かっていることは大変望ましい状況である。そのためにも、前年度までの学習事項を補充する指導を充実し、基礎的・基本的な事項を定着させていきたい。また、T・T（チームティーチング）や少人数指導、小学校においては教科担任制の導入等の取組について、充実していきたい。

学校司書の配置については、全小中学校に配置されている。学校図書館の充実が進んでいる一方で、計画的な活用が定着していないことが課題として挙げられる。あわせて、読書活動の推進にかかわる環境としては、比較的望ましい形で配置されている司書教諭を中心とした計画的な整備が望まれる。

全国学力・学習状況調査等の活用については、全国に比べて大きく下回っている。過去の調査結果の分析や調査の問題冊子などを利用し、具体的な教科指導の改善に活用したり、調査問題を授業の中で活用したり、学校の指導計画や取り組みの検討時の参考としたりするといった指導計画に位置づけた意図的・計画的な活用がより一層望まれる。

家庭・地域との連携・開かれた学校については、PTA・地域の人によるボランティア参加や学校公開日の実施などによる連携が図られており、本市の教育施策の特徴的な側面を反映している。今後も、ボランティアにおける小学校と中学校の連携を含め、さらに推進していきたい。一方、学校の教育活動に関するホームページによる情報発信については、セキュリティポリシーに則り、学校が独自に情報を発信できるようになったこともあることから、より一層の充実を期待したい。

また、家庭学習については、児童・生徒に家庭学習の課題を与え、その評価や指導をおこなうことや児童・生徒の家庭学習を促すための保護者への働きかけ、また、家庭学習の課題の与え方についての校内の教職員で共通理解を図ることに、小・中学校で大きな違いが見られ、全国に比べるとまだまだ課題が残るので一層の努力が望まれる。

校内研修については、すべての学校で、テーマを決めて取り組んでおり、講師の招聘、事例研究、授業研究などの実践的な研修を行っている。今後も、教員相互に学び合う校内研修の充実に努め、その成果を学校間で交流することにより、よりよいものを開発・共有していくことが期待される。

6 まとめ

教科に関する調査、児童・生徒質問紙調査、学校質問紙調査の結果から、各学校や教育委員会において、次の点に取り組むことが大切であると考えられる。

(1) 学校において

① 授業の充実・指導の改善のために

各教科における授業の充実・指導の改善を図るため次のような視点の見直しが大切である。

【小学校国語】・・・思考を深めて表現につなぐための学習活動の工夫

【中学校国語】・・・思考を深めて表現につなぐための学習活動の工夫

【小学校算数】・・・数学的な思考力・表現力を育て、学ぶ意欲を高める指導の工夫

【中学校数学】・・・事象を数理的に考察し、表現する能力を高める指導の工夫

今回の調査では、中学校国語が全国とほぼ同程度であったが、ほかの部分では、全国を下回る結果となった。そのなかでも、改めて懸念すべきこととして、無回答率の高さが挙げられる。

これらの様相から、先の“改善を図るための視点”に示したように、子どもに思考する場を意図的に設定し、子どもの考えや意見を受け止め、それらを生かす授業の一層の充実を図っていく必要がある。子どもたちが自ら考えることを大切にする授業を多く行い、それをグループで話し合ったり、学級全体で意見交換させたりすることを多分に取り入れていくことが大切である。

また、子どもたちが確実に学力を身につけていくためには、教師待ちでない自ら「問い」を発見することができる自発的な学習を促す指導が大切である。加えて、読書も大切な要素となることから、スクールボランティアや学校図書館司書と連携・協力するなど、発達の段階に応じた読書活動を推進するとともに、家庭学習充実のための指導などに授業も取り組んでいきたい。

さらに、子どもの思考を促し、質の高い試行錯誤を生み出し、相互に深めさせていく授業を実現するためには、教師相互の質の高い校内研究が大切である。教職員の指導力の向上をめざし、教職員同士の学び合いのある校内研究をさらに充実させ、その成果を他校に発信し、各学校での共有化が期待される。新採用の教職員が増え、人員構成のアンバランスが見える今日の学校において、日常的に行う教職員研修のさらなる工夫が求められる。日頃の教員同士の教え合いや研修の日常化をめざすとともに、教員間の望ましい人間関係を構築することが、学力向上を円滑に推進するための組織的な対応には欠かせない。

最後に、小学校における課題が、そのまま中学校における課題にもつながっている側面があることから、小・中学校の教員双方が課題を共有することが大切である。例えば、合同研究会で話題に挙げるなど、幼保・小・中一体教育を一層推進していくことが必要である。

② 保護者・地域との連携

『「おだわらっ子の約束」をいかし、基本的な生活習慣や規範意識の確立を図る』や「家庭と連携し、児童生徒一人一人の家庭学習の充実を図る」、「地域と連携し、スクールボランティアの一層の推進を図る」など、保護者・地域と共に、地域一体教育を推進していくことが、教育のさらなる充実につながる。

(2) 教育委員会において

① 授業の充実・指導の改善のために

児童・生徒一人一人の確かな学力の向上をめざし、「基礎・基本の定着」と「活用する力の育成」の両面の充実した指導を図るため、「教職員アカデミープランに基づいた授業の充実・指導

の改善を図るための研究・研修」、「学習意欲を育むための授業の工夫」「校内研究の充実を図るための施策」、などをさらに充実させることが大切である。

② 教育環境の整備

本年度11月に、回線的高速化や校内LAN整備、教育用・校務用コンピュータ等の充実を図るため、新教育ネットワークシステムの環境整備を行った。今後は、その効果的な運用を図る必要がある。ICT（情報通信技術）を活用した「わかる授業」の実践や、児童生徒の「情報活用能力」の育成、事務負担軽減等の教員の多忙化解消など、さまざまな側面からの活用を探り、充実させていくことが大切である。

③ 保護者・地域との連携

地域と連携しながら子どもたちの「生きる力」を育むためには、まず『小田原市学校教育振興基本計画』の共通理解を図ることが大切である。その基本理念のもと、「基本的な生活習慣や規範意識の確立を図る」ことなどの『おだわらっ子の約束』の定着や、スクールボランティアの一層の推進といった、幼保・小・中一体教育、地域一体教育を一層推進していかなければならない。

